

〈一般投稿論文〉 [研究論文]

トラブルの責任の所在を示す相互行為プラクティス —他者開始・自己実行の修復に用いられる「だから」を例に—*

中馬隼人
名古屋大学大学院生

This paper examines how “dakara” in other-initiated self-repair works in talk-in-interaction. Speakers use turn-initial “dakara” in repair proper in other-initiated self-repair to index a stance such that the addressee should understand what the speaker said in the prior-turn because both parties share some knowledge. Through this stance, participants can achieve various interactional tasks, one of which is to imply that the trouble responsibility belongs to the repair-initiator. This interactional practice can be verified by the response following the “dakara” repair proper and the composition of “dakara” repair itself.

キーワード： だから、他者開始・自己実行の修復、トラブルの責任、ターン冒頭

1. はじめに

日常会話は、必ずしもスムーズに進行するわけではなく、時に他の参加者の発話について理解できなかつたり、聞き取れなかつたりすることがある。そのような場合、主となるやりとりが一旦中断され、解決するための方略が取られることがしばしばある。このような方略は、修復 (repair) と呼ばれる (Schegloff, Jefferson and Sacks 1977 など)。例えば、次のようなやりとりである。

* 本稿執筆に際し、査読していただいた3名の先生方には、建設的で有益なご助言・ご指摘を数多くいただいた。また、林誠先生、横森大輔先生、安井永子先生をはじめ、多くの方々からご指導・ご助言をいただいた。深く感謝申し上げます。また本稿は、2018年度日本語用論学会第21回大会における口頭発表の内容に大幅な加筆・修正を施したものである。本稿における不備や誤りについては、全て筆者に帰する。

(1) (本稿筆者の作例)

- 01 A あれ、どうだった？楽しかった？
 02 B あれって何？
 03 A 旅行。
 04 B ああ、楽しかったよ。

01 行目で、AはBに「あれ、どうだった？楽しかった？」と質問をする。その後、02 行目でBはAの質問には答えずに、Aの発話の「あれ」が何を意味しているのかについて質問をしている(=修復開始)。その後、03 行目でAは「あれ」を、「旅行」と具体的な表現に置き換えることで、Bの理解の問題を解決している(=修復実行)。そして、04 行目でBは、「あれ」が「旅行」を意味していることを受け取り、一旦保留にしていた01 行目のAの質問に「楽しかったよ」と応答する。一方で、次のような例もある。

(2) (本稿筆者の作例)

- 01 A あれ、どうだった？楽しかった？
 02 B あれって何？
 03 A だから旅行。
 04 B ああ、楽しかったよ。

(1)と(2)に共通していることは、ターゲットとなる発話(ここでは、Aの「あれ、どうだった？楽しかった？」という発話)の一部(「あれ」)について、聞き手であるBが理解できないことを示し、それに対して、そのターゲットとなる発話を行ったAが自身の発話の一部を具体的な言葉(「旅行」)に置き換えることで、問題を解決しているという点である。

しかし、一点異なる点がある。それは、「あれって何？」という02 行目のBの質問を受けた後の03 行目のAの応答の仕方である。(1)では、「旅行」と言っているのに対して、(2)では「だから旅行」と異なる発話の組み立てを行っている。本稿で明らかにしたいのは、この種のやりとりにおいて使用される「だから」の働きである。

「だから」についての研究は、これまでに様々ある。「だから」が持つ主となる意味は、「昨日雨が降った。だから地面が濡れている」のように、「だから」によって示される前件と後件の間の「原因—結果」という論理的な因果関係である。一方で、「因果関係を示さない『だから』」(例:「人を好きになったことある?」「どういうこと?」「だから、女性をよ。」加藤1995: 18)が注目され、多くの研究がなされている。例えば、蓮沼(1991)、谷崎(1994)、加藤(1995)、浜田(1997)、岡本・多門(1998)、小西(2003)、メイナード(2004)、萩原(2012)などが挙げられる。このうち、会話や対話における「だから」の機能について言及している蓮沼(1991)、加藤(1995)、岡本・多門(1998)を取り上げる。

蓮沼 (1991) は、ドラマや映画のシナリオにおける対話を主なデータとして「だから」について分析を行っている。具体的には、対話型の「だから」の用法を4つに分類し、それらの用法に共通している特徴として、「自分の発言の土台となる情報や知識を、既存のものとして扱う」、「発言の土台となる情報は、聞き手にも共有されているはずだという含みを生む」、「誤解や意見の対立が生じた状況で、話し手が自己の発言の立脚点や論拠を示し、聞き手を説得する」を挙げている。

加藤 (1995) は、小説や映画のシナリオ、テレビ番組における対話をデータとして、「だから」についての分析を行っている。加藤によると、「だから」は、基本的に「原因・結果」を受ける接続詞と考えられているが、話し言葉においては、原因（理由）を意味する前件が認められないものがあり、それを「変則的な『だから』」と呼んでいる。加藤は、変則的な「だから」の用例を分析し、「自らの言わんとすることは理解され受け入れられていいはずだ」という「主体的・情意的側面」を突出させ、「だから」が元々持つ「原因—結果」という厳格な論理関係を欠落させているという特徴づけをしている。ただ、「だから」に先行するものは何もないと主張しているのではなく、「場面や状況」、「共通認識」、「常識」といった「前件」に値するものはあり、「原因—結果」の論理関係ほどの強いつながりではないが、「前提—帰結」という関係を「だから」によって提示し、自らの主張は「理解されていいはずだ」という情意を示すという。

岡本・多門 (1998) は、会話データをもとに、「だから」を10用法に分類し、各用法の特徴づけとそれぞれが持つ共通性について論じている。その諸用法の大部分に共通していることは、「前件と後件を因果的に関係づける」ということであり、因果関係のレベルには、「原因—結論」、「根拠—評価、望むべき事態、可能性のある事態」、「推論の根拠—聞き手がとるべき行動」のように様々なものと述べている。

以上の先行研究をまとめると、話し手は「だから」を用いることで、「特定の事柄について、既成である、または理解され受け入れられていいはずだ」という感情を聞き手に対して伝達する。さらに、「だから」が示す前件と後件の間には、「原因—結果」ほど強い論理関係ではなく、何らかのレベルの因果関係が認められるということである。

本稿は、これらの研究における記述を用いつつ、(1) と (2) で挙げたような修復の連鎖という特定の環境で用いられる「だから」が、どのように利用されているかについて議論する。上述の (1) と (2) のやりとりは、一方の参加者に理解の問題が生じた際に、それを解決する手続きがなされているという点で共通している。しかしながら、「だから」を使用することにより、相互行為上のどのような課題に対処しているのかについては、先行研究においても明らかになっていない。

本稿では、(1) と (2) で挙げた例のような修復連鎖、具体的には (i) ある発話を行った参加者 A に対して、その発話の受け手 B が発話の中にトラブル源（理解や聞き取りのトラブルの元となる要素）があることを示すために修復を開始する「修復の他者開始」

と、(ii) トラブル源を含む発話を行った A 自身が修復を実行する「修復の自己実行」から構成される、「他者開始・自己実行の修復」の連鎖に注目をする。そして、その連鎖における修復実行の位置で用いられる「だから」の相互行為的働きについて、明らかにすることを目的とする。

分析には、会話分析 (Conversation Analysis) の手法を用い、話し手と聞き手の微細なやりとりがどのように行われているかについて明らかにする。近年、会話分析を用いることにより、相互行為における言葉のやりとり (talk-in-interaction) において、その参与者たちが、様々な要素 (言語、プロソディ、視線、ジェスチャー、体の配置など) を資源としてどのように多様な行為を遂行しているのかが研究されている。その中でも、言語が果たす役割は重要なものであると注目され、¹ 相互行為言語学 (Interactional Linguistics) という分野のもと、多くの研究がなされている (Selting and Couper-Kuhlen 2001, Fox, Thompson, Ford and Couper-Kuhlen 2012, Couper-Kuhlen and Selting 2018 など)。² 日本語会話における言語使用についても、相互行為言語学の観点からの研究がいくつかなされている。例えば、特定の言語資源である「なに」が相互行為の中でどのように利用されているかについて、遠藤・横森・林 (2017) が明らかにしている。具体的に、「なに」という言語資源は、確認要求を行う際に極性疑問文と共に用いられ (例: 「なに、勉強してるのまだ?」)、その際、提示する確認内容は先行発話で明示的に述べられていないが、ある種の推論を経て得られたものであることを標識するという。この種の特定の環境で使用される「なに」は、いわゆる Wh 疑問文で使われる「なに」 (例: 「昨日何してたの?」) とは明らかにその働きは異なる。このように、会話分析のアプローチを用いた言語研究においては、各々の言語資源の働きが特に際立つような連鎖環境でどのような振る舞いをしていくかに注目をする。それにより、特定の言語資源がどのような相互行為上の課題を達成するために用いられているかを明らかにすることができる。

分析には、Talkbank (talkbank.org) 上の Callfriend JAPANESE コーパスおよび、Callhome JAPANESE コーパスの電話会話 (MacWhinney 2007) を使用した。具体的な時間は、各 5 時間の合計 10 時間 (Callfriend は 11 組分、Callhome は 10 組分の日常会話) である。この中から、質問—応答の連鎖における応答の冒頭で「だから」が使用されている

¹ このことは、相互行為において利用される様々な資源の中で、言語が最も高い優位性があるということを意味しているわけではない。実際に会話分析の分野では、相互行為分析をするにあたり、言語だけでなくあらゆる感覚様式を複合的に取り入れる必要性を重視しているマルチモダリティ研究が精力的に進められている。本稿は、扱うデータが電話会話であるという性質上、複数の感覚様式を総合的に扱うことはしないが、相互行為における特定の資源に何らかの優位性を認める立場は取っていない。マルチモダリティ研究については、Mondada (2018)、城 (2018)、安井・杉浦 (2019) 等を参照されたい。

² 相互行為言語学のアプローチの形成と展開については、横森 (2018) を参照されたい。

事例を 32 例抽出し、さらにその中の修復連鎖の事例である 11 例を主な分析対象とした。また、会話の書き起こしは Jefferson (2004) に基づいている。詳しい書き起こし記号については、本稿の最後に記載してある。

次節では、本稿のターゲットである修復の組織を中心に概観する。

2. 修復とトラブルの責任

2.1. 修復とは

修復とは、会話における発話の産出や理解、聞き取りにかかわるトラブル³に対処するための方法のことである。Schegloff, Jefferson and Sacks (1977) を皮切りに、主に会話分析の分野において、精力的に研究が進められている (Hayashi, Raymond and Sidnell 2013 など)。

Schegloff らによると、修復は、(i) 修復の開始 (つまりトラブルの存在をマークすること)、(ii) 修復の実行 (つまりトラブルを解決すること) という二つの段階に区別できる。また、誰が修復の開始、または実行を行うのか、という視点も重要である。換言すると、トラブル源 (理解や聞き取りのトラブルの元となる要素) の発話者 (自己) が修復を開始、あるいは実行するのか、または、トラブル源を含む発話を行った参与者以外の者 (他者) が修復を開始、あるいは実行するのか、という視点である。Schegloff, Jefferson and Sacks (1977) で述べられている修復の過程について、串田・平本・林 (2017) がまとめたものが、以下の表 1 である。

表 1 修復の開始・実行の組み合わせ (串田・平本・林 2017: 196)

	実行	自己	他者
開始			
自己		①自己開始・自己実行	③自己開始・他者実行
他者		②他者開始・自己実行	④他者開始・他者実行

紙幅の都合で、すべての修復のタイプを確認することはできないが、ここでは、本稿で中心的に扱う「他者開始・自己実行の修復」がどのようなものであるかを具体的に説明する (なぜ本稿で「他者開始・自己実行」の修復に注目するのかについては、2.2 で詳しく述べる)。

³ 串田・平本・林 (2017: 193-194) でも述べられているが、修復における「トラブル」は、意見の相違による言い争いや人間関係のこじれ、苦情、非難などのような「広義のトラブル」などの問題は含まず、理解や聞き取りにかかわるトラブルに限定される。

(3) [Callfriend4608_00:14] (串田・平本・林 2017: 193)

- 01 ケイタ 研究室が終わったからさ :.
 02 (0.4)
 03 ケイタ [んで:]
 04 シュン → [終わっ]たって:?
 05 ケイタ → あだから (0.3) 9月のコンプリの(.) 勉強に入ってる
 06 → こと?
 07 シュン あ本当:.

01 行目のケイタの発話の後には、シュンによる情報の受け取り（例：「へー」「ふーん」など）が来ることが適切となる。しかしながら、シュンは、そのように想定される連鎖を一旦中断した上で、04 行目でトラブル源（「研究室が終わった」という表現）についての質問をし、修復を開始することで、自らが理解のトラブルに直面していること示している。⁴ これに対して、ケイタは、05、06 行目で 01 行目の自らの発話を置き換え、「研究室が終わった」という表現が意味するところを説明することで、修復を実行している。つまり、この断片では、トラブル源を含む発話を行った参与者以外の者であるシュンが修復を開始し（他者開始）、トラブル源を含む発話を行ったケイタが修復を実行している（自己実行）という「他者開始・自己実行の修復」が行われていることが理解できる。

また、修復は発話の産出・聞き取り・理解のトラブルの解決を超えて、様々な社会的行為の遂行のための資源として用いられる（早野 2017: 87-90、串田・平本・林 2017: 216）。例えば、他者開始修復が、他の参与者の先行発話への不同意や抵抗の前触れとなることがある（Hayashi and Hayano 2013: 315-316、Schegloff 2007: 151-155）。他にも、会話の参与者が修復の開始や実行を行う際に、様々な言語資源を用いることで、起こった理解や聞き取りのトラブルが誰の責任にあるのかを示す方法があることが指摘されている（Robinson 2006、Kushida 2011）。2.2 では、修復におけるトラブルの責任の所在が、会話の中で、参与者間でどのように管理されているのかについて見ていく。

2.2. 修復連鎖におけるトラブルの責任の所在の示され方

相互行為の中で、理解や聞き取りにかかわるトラブルが起こった際に扱われうる事柄の一つとして、そのトラブルがどの会話参与者の責任で生じたのかという問題が挙げられ

⁴ 会話分析の分野では、(3) の 04 行目の発話のような、先行発話におけるトラブル源を繰り返しと引用の助詞「って」を用いる形式の他者開始修復を、「トラブル源を標的に定めた内容質問」と呼ぶ（串田・平本・林 2017: 210-213）。この形式を用いることで、修復開始者は自身が理解のトラブルに直面していることを示すことができる。

る。Robinson (2006) は、修復におけるトラブルが起こった原因が、トラブル源を含む発話を行った参与者にあるのか、それともそれ以外の参与者にあるのか、その責任の所在を示す方法について分析しており、そのことをトラブルの責任の管理 (managing trouble responsibility) と呼んでいる。例えば次のような例を挙げ、謝罪形式 (apology-based) の修復開始によって、トラブルの責任が自分にあることが表示されていることを示している。

(4) Robinson (2006: 148) Extract 7

01 911: A::n' what's your na:me.
 02 (.)
 03 CIT: Susie Lambornino?
 04 (0.4)
 05 911: Amberzino? [>()<]
 06 CIT: [Ell ay e::m? (0.3) bee oh a:re,
 07 (0.2) en eye:, en oh:,
 08 (1.2)
 09 911: I'm sorry. I couldn't hear ya=there's so much noise
 010 there it's- (0.3) zee ay wha:t?
 011 CIT: Ell ay e:m, ... ((continues to repeat spelling of
 name)

この会話は、アメリカの救急サービス職員（以下、911）とそれに電話をかける市民（以下、CIT）との電話会話である。01 行目で 911 は、CIT の名前を尋ね、その後 03 行目で CIT が自分の名前を答える。05 行目で 911 は、発話を上昇調で行い、03 行目で CIT が行った発話（名前を述べる）について自分の理解が正しいかどうかを、自らの理解候補を提示することで、確認要求を行っている。その後、06、07 行目で CIT は、05 行目の 911 による確認要求に対して、Ell(L), ay(A), e:m(M), bee(B), oh(O), a:re(R), en(N), eye:(I), en(N), oh:(O) と発話し、自分の名前のスペルを伝えることで、確認付与を行っている。08 行目の 1.2 秒の沈黙の後、09 行目で、911 が “I’m sorry.” という発話形式を用いて修復開始を行い、11 行目で CIT が自分の名前のスペルを繰り返す。09 行目の 911 による謝罪形式の修復開始は、CIT の名前が十分に聞き取れなかったという聞き取りのトラブルの責任が、CIT でなく 911 自身にあることを示す方略となっている。このことは、“I’m sorry.” に、「音がうるさくて聞こえなくて... (I couldn’t hear ya=there’s so much noise) という説明がすぐに後続し、自分 (911) が聞こえなかったことを明示的にしていることから説明がつくという。

また日本語にも、修復が行われる相互行為場面において、トラブルの責任の所在を示す

ためのプラクティスがあることが指摘されている。Kushida (2011) は、理解や聞き取りの問題に対して、理解候補の提示をすることで他者修復開始を行い、その発話への応答として産出される「うん」と「そう」について分析をしている。「理解候補の提示」とは、ある参加者の発話における一部分について理解や聞き取りのトラブルがあった際、ターゲットとなるトラブル源に対する受け手の理解が正しいかどうかについて、受け手が何らかの形で言い換えをして、当該発話の産出者へ確認要求をすることである。例えば、以下のようなりとりに見られる。

(5) (本稿筆者の作例)

A: こないだ友達と「XYZ カフェ」に行ってきた。(B にとってのトラブル源を含む発話)

B: そこって、あの大学の近くにある所? (理解候補の提示・確認要求・修復開始)

A: うん/そう。(理解候補の提示に対する確認付与・修復実行)

まず、A の発話における「XYZ カフェ」が B にとってある程度認識できるが、あまり自信がない部分 (トラブル源) であり、B が (全く分からない状況より程度は低いが) 理解のトラブルに直面している。それは B が「そこって〜?」と、「XYZ カフェ」を「あの大学の近くにある所」と言い換えをすることにより、(他者) 修復開始をしていることから分かる。それに対して、A が「うん/そう」と B が提示した理解の候補を承認する形で、確認付与 (もしくは、修復の自己実行) を行っている。

Kushida によれば、このような相互行為場面において、二種類の確認付与 (修復実行) のやり方があるという。一つは、トラブル源を含む発話を行った者がその受け手の理解が正しいことをシンプルに認める形で確認付与をする場合である。もう一つが、トラブル源を含む発話を行った者が、自身の先行発話に何らかの問題があり、そこで起こったトラブルが、発話の受け手の聞き取りや理解の問題ではなく、自分の発話の産出の問題であったことを認め、発話の受け手が自分の発話をより良い形に言い換えて、手助けしてくれたことを認める形で確認付与 (修復実行) をする場合である。より具体的には、前者の確認付与は「うん」を伴い、後者の確認付与は「そう」を伴う。

Kushida は、前述の Robinson (2006) の議論を発展させる形で、理解候補を提示して確認要求を行う他者開始修復に対する修復実行で、トラブルの責任の管理が行われることがあると指摘している。理解候補の提示への「うん」を伴う応答は、シンプルに確認を付与するだけであるが、「そう」を伴う応答に関しては、発話の受け手の言い換えの方がよりよい形であることを発話者が認めるという意味で、起こったトラブルの責任は、トラブル源の発話者である自分にあることを表示するという。

これらの研究を、本稿筆者が図示したものが、次の図 1 と図 2 である。



図 1 Robinson (2006) の “I’m sorry?”

図 2 Kushida (2011) の「そう」

両研究は、修復連鎖における位置が異なるが (Robinson (2006) は修復開始の位置、Kushida (2011) は修復実行の位置)、修復のトラブルの責任が “I’m sorry?” または、「そう～」を用いた発話者自身にあるという点で共通している (それぞれの矢印は、トラブルの責任が発話の受け手ではなく、発話者自身にあることを示す。①と②はターンの順序を示す)。

また Robinson は、このようなトラブルの責任の管理がなされる一つの理由として、修復連鎖で起こったトラブルが複数のタイプ (話し方のトラブルと聞き取りのトラブル等) になりうる場合があり、その際にどちらの参与者にも責任が生じることになってしまうことを挙げている (Robinson 2006: 141)。例えば、ある会話参与者 A が小さな声で発話したことに対して、別の会話参与者 B が聞き返しをし、修復を開始した場合、そこで起こった修復のトラブルは、A の話し方に問題あったとも言えるし、B の聞き取りに問題があったとも言える。もちろん、そのトラブルの責任がどちらにあるかを明示的にしないことも場合によってはあるが、どちらかの参与者が修復のトラブルの責任の所在がどちらにあるかを明白に示したい場合に、このトラブルの責任の管理を示すための方法が用いられる。

このことを考慮に入れると、修復のトラブルの責任の管理とは、異なる参与者同士の間で行われる交渉であると言える。よって、修復のトラブルの責任の管理がどのようになされるかを分析するために、Robinson (2006)、Kushida (2011) と同様、本稿でも、他者開始・自己実行の修復という連鎖環境に注目した。本稿でターゲットとしているのは、他者開始・自己実行の修復の修復実行のターン冒頭で利用される「だから」であり、それがトラブルの責任が修復開始をした参与者にあることを表示するために用いられていると考える。次節では、実際のデータから、「だから」が修復連鎖の中でどのように使用されているのかについて見ていく。

3. 会話の進行性と修復連鎖—「だから」が示すスタンスとの関係—

3.1. 質問—応答連鎖で用いられる「だから」が示すスタンス

相互行為における言葉のやりとりの中で、参与者たちの特定の事柄にかんする知識の有

無が、発話に用いられる言語資源によって示されることがある (Heritage 2012 など)。本稿で扱う「他者開始・自己実行の修復連鎖」は、広い意味では質問—応答という連鎖構造になっている。Heritageによると、通常、質問という行為は、質問者が自分より知識を持っているであろうと想定することができる他の参加者に向けて行われる (質問者 K- → 他の参加者 K+ ※ K は知識、+ と - は相対的な知識の差を示す)。質問に対する応答は、特定の事柄について、より知識を持っている参加者が、より知識を持たない参加者 (質問者) へ向けて行う (応答者 K+ → 他の参加者 (質問者) K-)。さらに重要なことは、質問への応答の仕方は、会話参加者が特定の事柄についてのお互いの知識にどのような形で指向しているかによって様々であり、その異なる指向性は様々な文法形式によって表されるということであるという (Heritage 2012: 4-7)。

このことは、次の (6) において示される。

(6) [Callhome1713_10:15]

((A はアメリカ在住。東京で働きたいと思っており、そのためにまずはアメリカで日本の企業へ就職しようと就活を行っている。この断片の前に、A はアメリカの生活が嫌になってきており、東京へ行きたい旨を B へ伝えている))

- 01 A 俺将来は :: (0.6) もあれで日本に行くから .
 02 (0.9)
 03 B [° hhh°
 04 A [° うん° (0.9) 本当に .
 05 (1.5)
 06 A [° うん°
 07 B → [あれって ?=
 08 A → => だから < 東京勤務になるから .
 09 (1.3)
 10 B ああ ::
 11 A ° うん° (1.1)° そう°

01 行目の A の発話は、「あれで日本行くから .」というもので、「あれ」という指示代名詞を含んでいる。それに対して、07 行目で B は「あれって？」と発話することで、01 行目の A の発話の一部である「あれ」の内容について質問している。08 行目で A は、「だから」を伴って B による 07 行目の質問に回答している。この断片の説明でも述べている通り、A はアメリカの生活が嫌になっており、東京に行きたいことを B に既に伝えている。

ここから言えることは、質問者が K- の立場から質問を行ったとしても、その質問を向けられた参加者が、質問者が知っていて当然だと捉えている事柄については、「理解していて当然だ」というスタンスを、「だから」という言語資源によって示すことができるとい

うことである。このことは、1節で言及した、先行研究において指摘されてきた「だから」の（「ある特定の事柄について、相手は理解しているはずだ」という気持ちを伝えるという）特徴づけとも矛盾しない。

ただし、ここで考えておきたいことは、他者開始・自己実行の修復連鎖における、修復実行のターン冒頭の位置という特定の環境で「だから」が用いられるケースと、修復連鎖以外で「だから」が用いられるケースとでは、どのような違いがあるのかということである。一看すると、どちらも「あなたが質問し、分からないと示している事柄は、既知のものであるはずだ」ということを伝えているように見える。このことは、なぜ本稿で修復連鎖における「だから」を分析する意義があるのか、という問いに換言することもできる。このことについて、3.2で確認する。

3.2. 修復連鎖で用いられる「だから」と修復連鎖以外で用いられる「だから」

ここでは、修復連鎖で用いられる「だから」と修復連鎖以外で用いられる「だから」がどのように異なるのかについて確認しよう。どちらの事例も、質問の後の応答の位置で「だから」が用いられるわけだが、それぞれの質問がどのような性質であるのかについて注目したい。まずは、修復連鎖以外で用いられる「だから」の事例を見てみよう。

次の(7)は、アメリカ在住の男性二人（二人は語学学校で英語を勉強している）による会話の一部である。この断片の前では、国際電話の値段がだいぶ安くなってきたという話をしており、その話が一段落したところで、02行目でBがAに質問をしている。

(7) [Callfriend6228_06:08]

01 A [で :: ::]

02 B [(おい)と] ところで勉強進んでる?

03 (0.5)

04 A ん :: > だから < 最近やっとな :: 試験が終わったんだよ = きの :: か

05 (0.5)

06 B あ! (0.3) > そうそうそう < 今日言ってたわ先生が ::

02行目のBによってなされた質問の後、0.5秒の沈黙があり、04行目で「だから」を伴ってAによってその質問への応答がなされている。その後、06行目でBが「あ!」と気づきの表明をし (Endo 2018, Hayashi and Hayano 2018 など)、今日先生が言っていたことを思い出したということを示していることが分かる。また、「そうそうそう」という発話も、Bが「Aが試験を終えた」という事柄に気づいたことに示しているものと考えることができる (定延 2002: 91-92)。これらのことから、AがBに対して「自分(A)が、試験を最近終えたということは理解されてもよいだろう」というスタンスを示していたことを、B自身も理解した上でAの応答の受け取りを行っているであろうことが分かる。

ここで注目したいことは、02行目でBによってなされる質問の組み立て方である。「ところで」という言語形式が用いられているように、前のトピックとの断絶を示すことで、これからなされる質問は、国際電話の値段のことは関係がないということを明示的にしている。つまり、前のやりとりとは関連がないトピックを導入するための質問をすることで、新しい連鎖が開始されていると言える。

一方、次の(8)(p. 83の(3)の再掲)は、修復連鎖で用いられる「だから」の事例である。友達同士である男性2名による会話である。

(8) ((3)の再掲) [Callfriend4608_00:14](串田・平本・林 2017: 193)

- 01 ケイタ 研究室が終わったからさ :.
 02 (0.4)
 03 ケイタ [んで :]
 04 シュン → [終わっ] たって :?
 05 ケイタ → あだから (0.3) 9月のコンプリの(.) 勉強に入るって
 06 → こと?
 07 シュン あ本当 :.

p. 83でも述べたように、01行目でケイタがシュンに行った「研究室が終わった」という発話の後には、シュンによる情報の受け取りが来ることが適切となる。しかし、シュンは、そのように想定される連鎖を一旦中断し、「研究室が終わった」という表現が理解できないことを示す修復開始を行っている。その後、05、06行目で自らの発話を「9月のコンプリの勉強に入るってこと」と置き換えをし、修復を実行している。これらをまとめると、04行目のシュンの質問が他者修復開始、05、06行目のケイタによる発話は自己修復実行である。よってこれは、いわゆる「他者開始・自己実行の修復」であり、ここでは修復実行の位置で「だから」が使われている。また、「だから」を使うことによって、ケイタは「『研究室が終わる』と言えば、『9月のコンプリ(コンプリヘンシブ試験)⁵の勉強に入るといふこと』であることは理解されてもよいはずである」というスタンスを示しているものと聞こえる。

これら二つの断片は、一見すると「だから」を用いて話者は同じことをやっているように見える。しかしながら、一点大きな相違点が観察できる。それは、「だから」の前のターンにおける質問が、会話の進行性(progressivity)を阻害しているのかどうかという点である。前述の通り、(7)におけるBによる質問は、新しいトピックを導入するためのもの

⁵ ケイタとシュンは、アメリカの大学院に通っている。アメリカの大学院の学位取得の典型的なパターンは、コースワークの授業を終えた後、コンプリヘンシブ試験を受け、学位論文審査のプロセスへと移るといふものである。

である。そのため、会話の進行性という観点で言えば、それが進められていると考えることができる。一方で、(8)における04行目のシュンによる「終わったって:?)」のような質問(他者修復開始)は、01行目のケイタによる「研究室が終わったからさ:。」という語りへの応答を一旦保留にし、その語りの内容についての理解のトラブルに直面していることを示すものである。つまり、進行性の観点から言うと、それが阻害されているということである。

会話におけるあらゆる要素(音の連なりや、言葉の連なり、ターンの連なりなど)は、次のものへ進んでいくことが選好される(なぜなら、それらが次へ進まないとは話は進行しないから)(Schegloff 2007, Stivers & Robinson 2006など)。しかしながら、参加者間で聞き取りや理解等のトラブルが生じた際は、一旦その進行性を止めたくて、そのトラブルを解決し、解決がなされた後に元の連鎖に戻り、それを再び進行させる。これが修復連鎖の特徴である。よって、進行性という観点から捉えると、(8)のような他者開始修復の連鎖の事例においては、進行性が修復開始者((8)で言うと、シュン)によって一旦止められた後に、修復実行者((8)で言うと、ケイタ)により「だから」が用いられていると言えよう。

では、なぜ進行性が止められた後に、「だから」を用いて相手に「今あなたが理解できていない事柄は理解されても良いはずだ」というスタンスを示す必要があるのだろうか。考えうる一つの答えとしては、「語り—受け取り」や「質問—応答」のような、主となる活動が他者開始修復によって止められることは、会話が進行することへの選好性を考慮に入れると、問題であると扱われうるという点が挙げられる(Schegloff 1979: 277-278など)。ましてや、理解されてもよいはずであると修復開始をされた参加者が考えていた事柄について、修復開始者が理解できていないことが、会話の進行性が止まったことの原因となっているのであれば、修復開始を受けた参加者に修復のトラブルの責任があるというよりも、むしろ修復開始者にその責任があると示す必要があると考えるのは、合理的であろうと思われる。

次の4節では、「だから」を伴う修復の実行が、トラブルの責任が修復開始者にあることを表示するプラクティスであることを、具体的なデータ分析から示す。その証拠が現れる場所として、大きく分けて二つの位置に注目した。一つは、「だから」を伴う修復実行に対する聞き手の反応がなされる位置で、もう一つは「だから」を伴う修復の実行がなされる位置である。

4. 「だから」によって示される修復のトラブルの責任

4.1. 証拠1: 「だから」を伴う修復実行に対する聞き手の反応

「だから」を伴う修復実行が、修復開始者にトラブルの責任があることを示すプラクティ

た車の値段の「差」のことを指していると考えられる。その後、17行目で0.7秒の沈黙があることから、Bが14、16行目のAの発話について理解できていないことが示唆される。このことは、18行目でAが「一年間使ってね」 という発話を付加することで、「値段の差」の意味をBが理解しやすいように組み立て直していることから理解可能である。しかし、それでもBが「値段の差」というのが理解できなかったことが、19行目の発話から分かる。「ねだん ::」と少し音を延ばすように産出することで、理解ができていないことを示しつつ、「～っていうのは ::?」という発話の組み立てをすることで、その表現が何を意味するのかについての説明をAに求めているように聞こえる（他者修復開始）。すると、20行目でAは、「だから」を伴い「だから買った値段引く売った値段？」と「値段の差」という自身の14行目の発話を言い換えることで、修復の実行を行っている（修復の自己実行）。その後、0.9秒の沈黙の後、22行目でBは、「あ ::::::::::::::::::::」と、認識的状态の変化 (Heritage 1984) を示す「あ」を長く、強く産出することで、Aの発話の意味をよく理解したことを示している。Endo (2018: 160-162) によると修復連鎖の第三要素として用いられる「ああ」は、自らの認識的状态の変化と同時に、自らがその発話の一部について、以前から独立した知識を持っており、記憶探索に一時的に失敗してしまったことにより、理解や認識のトラブルが起こってしまったことを示すものであるという。Endoによるこの分析を踏まえると、22行目のBによる「あ ::::::::::::::::::::」という修復連鎖に後続する第三要素は、典型的な記憶探索とは異なるかもしれないが、少なくとも自分の理解に一時的に問題があったことを認める発話の組み立てになっていると理解することができる。

さらに、BによるAの修復実行の理解の度合いが強いことがこの発話の組み立てから分かる。つまり、14、16行目のAによる発話の意図について、22、23行目で「(車を) タダであげてもまあ (d) ナガノ君以上にはお金を払うことはないってことか」と自ら推測し、Aの発話の言い換えを行っている。Sacks (1992: 141-144) によれば、相手の発話に対して、ただ繰り返すをするよりも、それを言い換える方が理解の度合いが強いという。何故ならば、その事柄についてよく理解していなくても相手の発話を繰り返すことは可能である一方で、相手の言ったことを自分の言葉で言い換えるという行為は、相手の発話についてよく理解していなければ、可能とならないからである。したがって、(9) の22、23行目でBがAの発話を言い換えていることにより、Bが自らの理解の強さを示していることが認識可能であると言える。

ここで指摘した以上のことを考慮に入れると、「だから」を用いた修復実行を受けた修復開始者（ここでは、B）は、修復実行者（ここでは、A）のトラブルの責任の付与に指向した結果、このような発話の組み立てをしているのではないかと考えられる。つまり、Aが、ここで起こった修復のトラブルの責任を、その修復開始者であるBにあることを表示することを受けて、確かにAが言うようにそれを理解できるはずであったことを認め

(「あ…」の部分)、そして、発話を言い換えることによって自らが「値段の差」について強く理解できることを示している(「タダであげてもまあ～ってことか」の部分)と考えることは、合理的なことであると考えられる。

4.2. 証拠 2: 「だから」を伴う修復の実行

次に、「だから」を伴う修復実行がどのように組み立てられているかを微細に分析することにより、それがトラブルの責任を修復開始者にあることを示すプラクティスであることを論証していく。(10)は、アメリカ在住の娘と日本に住む母親との会話である。断片の少し前から、母親が実家の隣の小島さん宅で飼われているポチという犬に起こった出来事についての物語を語っている。物語を語る(storytelling)という活動において、語り手は、自身が経験したことや見聞きした出来事を時間の流れに沿って語り(串田・平本・林 2017: 170)、物語の受け手は、語り手が話している間は、聞き手であることを示し、語り手が話を継続させることを促す(03、06、25、28行目の娘による「うん」という反応⁶)。また、聞き手は物語の適切なきに適切な反応をするために、クライマックスの位置を常にモニターしながら物語を聞き続ける必要がある(Mandelbaum 2012: 499)。⁷

(10) [Callhome3008_11:04]

- 01 母 そうするとね庭のところね、白いものがいっぱい散らかってる
 02 わけ、=
 03 娘 =うん。
 04 (0.4)
 05 母 でね=ポチがなんか一生懸命食べてるのね。
 06 娘 うん。
 ((17行省略 母が咳込み、娘がそれを気遣う))
 24 母 >なんだろう<と思ったの。
 25 娘 うん。
 26 (0.3)

⁶ 物語や語りなど、一方の参加者がある程度の発話スペースを確保するような活動においては、その聞き手は常に聞き手であり続けることに指向する。つまり、語り手の発話が文法的に終了していると認識でき、順番交替が可能な時点に到達しても、聞き手は「うん」、「ほう」、「それで」などの言語資源を用い、進行中の語りの続きを促す。語りにおいて用いられる「うん」のような、相手の語りを促す要素は、「継続を促す要素 (continuer)」(Schegloff 1982、串田・平本・林 2017: 181)と呼ばれる。

⁷ 物語を語る活動において、クライマックスになるところで、より詳細に出来事が語られるということが指摘されている (Schegloff 2000、西阪 2008: 372-373 など)。

- 27 母 そ：したらね,(0.5).hh パンの耳をさ：,
 28 娘 うん.
 29 母 部屋のなかからさ=ば：:っ庭に- さ：,(0.4).hh もう一面散ら
 30 ばるように投げてるんだよゝ
 31 (0.9)
 32 娘 誰が?
 33 (0.4)
 34 母 >°だから°<小島さんちの誰かがでしょうよ.=奥さんか旦那さんか=
 35 娘 =うん.

母親は、最初は非明示的な表現である「白いもの」(01行目)が何であるかが、物語のクライマックスで明らかになるように語りをデザインしていることが分かる(「なんだろうと思ったの」(24行目))。また、30行目の母親による発話末の音調が若干上がっていること(「ゝ」という記号で示される)を考慮に入れると、この後に聞き手である娘に物語のクライマックスへの反応を求めているように聞こえる。

物語を語ることは、そのクライマックス(この断片では、「(ポチに投げられていた)白いもの」が食パンであったこと)において、聞き手の「笑い」、「驚き」などの反応を求める。しかしながら、それがなされず、娘は語りの別の部分(誰がパンを投げていたのか)に焦点を当て、修復を開始している(32行目)。直前に0.9秒という長い沈黙があることから、娘がここで理解の問題に指向し、修復を開始していることが認識可能である。それに対して、母親は「だから」を用いることで、パンは小島さんの家から投げられているわけだから、パンを投げたのはその家の誰かであることは、推論可能であるはずだというスタンスを示し修復実行を行っている(34行目)。

ここで注目したいのは、34行目の母親による修復実行の組み立てである。まず、娘によってなされた「誰が?」という修復開始に対して、母親は、特定の人物を提示して修復実行を行っていない(「小島さんちの誰か」「奥さんか旦那さんか」)。このような修復実行は、求められていることに適切に答えていないため、本来であれば問題となりうるかもしれない。しかしながら、この物語を語るという特定の相互行為場面に見られる事情に鑑みて、誰がパンの耳を庭に投げていたかどうかは明らかにされなくても問題とはならない。何故ならば、前述の通り、母親は「白いもの」の正体を明らかにすることを、この物語という活動のクライマックスとなるようにデザインしていたことが理解可能であるからだ。

さらに、「でしょうよ」という発話が下降調で産出(「。」という記号で示される)されていることも重要であると思われる。終助詞の「よ」は、話し手と聞き手の認識のギャップをマークするものであり、話し手の方により知識があることが示される(益岡・田窪1992: 52-52、Hayano 2013: 115-120など)。また、小山(1997)によると「よ」が下降

調のイントネーションを伴って産出される場合は、話し手と聞き手の認識のギャップをマークするだけでなく、両者に認識の食い違いが起きていることが示されるという（小山 1997: 105-106）。「よ」にかんするこれらの記述をふまえると、34行目の母親による発話は、物語のクライマックスで娘がどのように反応すべきかについて、母親と娘との間に認識のギャップがあることを示すだけでなく、そこでは認識の食い違いが起っており、娘の方の認識は正しくないことを示していると考えられるだろう。

前述した二点（求められた修復実行をしていないという点と「でしょうよ」という発話を下降調で産出している点）を考慮に入れると次のことが言える。まず、32行目の娘による修復開始は、物語の聞き手という観点から考えると、語り手である母親にとって不適切なものであるということ。そして、物語のクライマックスの位置で、それへの反応をせずに会話の進行性を止めた娘に対して、母親が「パンの耳を投げた人が誰であるかを特定することは、ここでは特に問題としていないことは明らかであり、それが理解されてもいいはずだ」というスタンスを、「だから」を用いて示している。

では、なぜ母親はこの位置でそのようなスタンスを示しているのだろうか。それは、ここで起きたトラブルは自らの語り方についての問題があったわけではなく、娘が母親の物語のデザインと、物語の聞き手としての振る舞いについて理解できていなかったことに起因していることを相手に示すためであると考えられることは、合理的であろう。

これら二つの断片から、「だから」を修復実行の位置で使うことによって、聞き手（他者修復開始者）に修復のトラブルの責任を示していることは、(i)「だから」を伴う修復実行を受けた聞き手の反応や、(ii)「だから」を伴う修復実行の組み立てに如実に表れているということが理解できる。

5. 結語

本稿では、他者開始・自己実行の修復における修復実行のターン冒頭の「だから」が、修復のトラブルが起こった責任が修復開始者にあることを示すために利用されていることを示した。他者開始・自己実行の修復連鎖の修復実行の位置で用いられる「だから」は、次の図3のようになる。

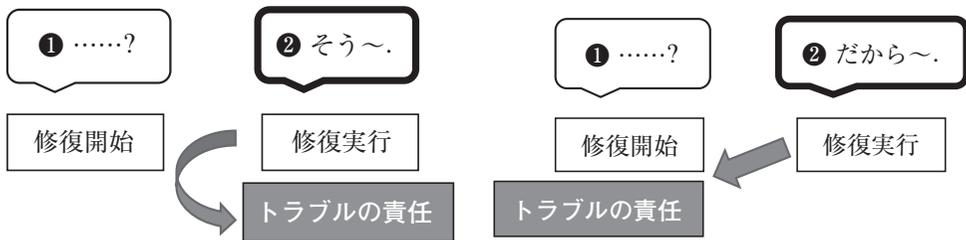


図2 Kushida (2011) の「そう」(再掲) 図3 本稿の修復連鎖における「だから」

本稿の対象である「だから」の発話は、図2 (p. 86の再掲) のKushida (2011) における「そう」と同様、修復連鎖における修復実行の位置の発話という意味では共通している。しかし、「そう」を用いることは、修復実行者である自分にトラブルの責任があることを示す一方で、「だから」を用いることで、修復開始者である（「だから」が含まれる）発話の受け手にあることを示すという点が異なる。図3における矢印は、トラブルの責任が「だから」を含む発話の受け手である修復開始者にあることを示している。これらの図で示しているように、どのような連鎖環境や発話形式であるのか、また修復開始の位置なのか修復実行の位置なのかによって、トラブルの責任が誰にあるのかを示すやり方は様々である。

また、本稿が示唆することとして、ターン冒頭で言語資源がどのように利用されるのか、という問いについての理解を深めるための一つの可能性を提示することが挙げられる。Heritage が述べているように、ターン冒頭の位置は、先行発話者が述べたことと、現発話者がこれから述べることとの関係性を伝達する上で非常に重要で、戦略的な位置である (Heritage 2002: 2)。ターン冒頭の位置で使われる言語資源が、様々な相互行為のために用いられることについて多くの研究がなされており (Kim and Kuroshima 2013、Heritage and Sorjonen 2018 など)、本稿で扱った「だから」もその一つの事例として考えることができる。

最後に今後の課題として、修復連鎖以外の連鎖位置（疑問文に対する応答、話を開始・展開させるとき）や冒頭以外のターン上の位置（ターン内、ターン末など）で、どのように「だから」が利用されるのかという問いが挙げられる。このような問いに取り組むことは、Schegloff (1996) で提唱されている「位置に敏感な文法 (positionally sensitive grammar)」についての考察を深めることに繋がると言えるだろう。

【書き起こしの記号】

()	不明瞭な発話	[]	オーバーラップ
-	カットオフ	=	間隙のない発話
(数)	ポーズの秒数	(.)	ごく短いポーズ
° °	声量の小さい発話	< >	ゆっくりした発話
> <	速い発話	↑	ピッチの上昇
↓	ピッチの下降	:	音の延伸
—	強調された発話	h	呼気
.h	吸気	.	下降イントネーション
,	継続イントネーション	?	上昇イントネーション
∩	半上昇イントネーション		

参考文献

- Couper-Kuhlen, E. and M. Selting. 2018. *Interactional Linguistics: Studying Language in Social Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Endo, T. 2018. “The Japanese Change-of-state Tokens A and Aa in Responsive Units.” *Journal of Pragmatics* 123, 151-166.
- 遠藤智子・横森大輔・林誠. 2017. 「確認要求に用いられる感動詞的用法の『なに』—認識的スタンス標識の相互行為上の働き—」、『社会言語科学』20(1)、100-114.
- Fox, B. A., S. A. Thompson, C. E. Ford and E. Couper-Kuhlen. 2012. “Conversation Analysis and Linguistics.” In Sidnell, J and T. Stivers (eds.) *The Handbook of Conversation Analysis*, 492-507. Oxford: Blackwell.
- 萩原孝恵. 2012. 『「だから」の語用論：テキスト構成的機能から対人関係的機能へ』東京：ココ出版.
- 蓮沼昭子. 1991. 「談話における『だから』の機能」、『姫路獨協大学外国語学部紀要』4、137-153.
- 浜田麻里. 1997. 「話し言葉におけるダカラの分析試論」、『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号、103-112.
- Hayashi, M. and K. Hayano. 2013. “Proffering Insertable Elements: A Study of Other-initiated Repair in Japanese.” In Hayashi, M., G. Raymond and J. Sidnell (eds.) *Conversational Repair and Human Understanding Studies in Interactional Sociolinguistics* 30, 293-321. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hayashi, M. and K. Hayano. 2018. “A-prefaced Responses to Inquiry in Japanese.” In Heritage, J. and M. Sorjonen (eds.) *Between Turn and Sequence: Turn-initial Particles across Languages*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hayashi, M., G. Raymond and J. Sidnell (eds.) 2013. *Conversational Repair and Human Understanding. Studies in Interactional Sociolinguistics* 30. Cambridge: Cambridge University Press.

- Hayano, K. 2013. "Territories of Knowledge in Japanese Conversation." (Unpublished doctoral thesis). Radboud University Nijmegen.
- 早野薫. 2017. 「修復の組織」、『日本語学』36-4、82-92.
- Heritage, J. 1984. "A Change-of-state Token and Aspects of Its Sequential Placement." In Atkinson, J. M. and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 299-345. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. 2002. "Oh-prefaced Responses to Assessments: A Method of Modifying and Agreement/Disagreement." In Ford, C., B. Fox and S. Thompson (eds.) *The Language of Turn and Sequence*, 196-224. New York: Oxford University Press.
- Heritage, J. 2012. "Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge." *Research on Language and Social Interaction* 45 (1), 1-29.
- Heritage, J. and M. Sorjonen (eds.) 2018. *Between Turn and Sequence: Turn-initial Particles across Languages*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jefferson, G. 2004. "Glossary of Transcript Symbols with an Introduction." In Lerner, G. (ed.) *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, 13-31. Amsterdam: John Benjamins.
- 城綾実. 2018. 「相互行為における身体・物質・環境」、平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実(編)『会話分析の広がり』、97-126、東京：ひつじ書房.
- 加藤薫. 1995. 「原因・理由を受けない「だから」:「だから」の主體的側面の突出」、『早稲田日本語研究』3、14-31.
- Kim, H. R. S. and S. Kuroshima. 2013. "Turn Beginnings in Interaction: An Introduction." *Journal of Pragmatics* 57, 267-273.
- Kushida, S. 2011. "Confirming Understanding and Acknowledging Assistance: Managing Trouble Responsibility in Response to Understanding Check in Japanese Talk-in-interaction." *Journal of Pragmatics* 43 (11), 2716-2739.
- 串田秀也・平本毅・林誠. 2017. 『会話分析入門』東京：勁草書房.
- 小西いずみ. 2003. 「会話における「ダカラ」の機能拡張—文法機能と談話機能の接点—」、『社会言語科学』6 (1)、61-73.
- 小山哲春. 1997. 「文末詞と文末イントネーション」、『文法と音声』、97-119、東京：くろしお出版.
- MacWhinney, B. 2007. "The TalkBank Project." In Beal, J. C., K. P. Corrigan and H. L. Moisl (eds.) *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases* 1, 163-180. Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Mandelbaum, J. 2012. "Storytelling in Conversation." In Sidnell, J. and T. Stivers (eds.) *The Handbook of Conversation Analysis*, 492-507. Oxford: Blackwell.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法—改訂版—』東京：くろしお出版.
- Mondada, L. 2018. "Multiple Temporalities of Language and Body in Interaction: Challenges for Transcribing Multimodality." *Research on Language and Social Interaction* 51 (1), 85-106.
- メイナード, 泉子・K. 2004. 『談話言語学』東京：くろしお出版.

- 西阪仰. 2008. 『分散する身体 エスノメソドロジ－的相互行為分析の展開』東京：勁草書房.
- 岡本真一郎・多門靖容. 1998. 「談話におけるダカラの諸用法」、『日本語教育』98、49-60.
- Robinson, J. D. 2006. “Managing Trouble Responsibility and Relationships During Conversational Repair.” *Communication Monographs* 73 (2), 137-161.
- 定延利之. 2002. 「「うん」と「そう」に意味はあるか」、定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』、75-112. 東京：ひつじ書房.
- Sacks, H. 1992. *Lectures on Conversation, vol. 2*. Oxford: Blackwell.
- Schegloff, E. A. 1979. “The Relevance of Repair to Syntax-for-conversation.” In Givón, T (ed.) *Syntax and Semantics vol. 12: Discourse and Syntax*, 261-286. New York: Academic Press.
- Schegloff, E. A. 1982. “Discourse as an Interactional Achievement: Some Use of ‘Uh huh’ and Other Things That Come between Sentences.” In Tannen, D. (ed.) *Analyzing Discourse: Text and Talk*, 71-93. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Schegloff, E. A. 1996. “Turn Organization: One Interaction of Grammar and Interaction.” In Ochs, E., E. A. Schegloff and S. A. Thompson (eds.) *Interaction and Grammar*, 52-133. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A. 2000. “On Granularity.” *Annual Review of Sociology* 26, 715-720.
- Schegloff, E. A. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis, vol. 1*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., G. Jefferson and H. Sacks. 1977. “The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation.” *Language* 53, 361-382.
- Selting, M. and E. Couper-Kuhlen (eds.) 2001. *Studies in Interactional Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Stivers, T. and J. D. Robinson 2006. “A Preference for Progressivity in Interaction.” *Language in Society* 35, 367-392.
- 谷崎和代. 1994. 「談話標識についての一考察—『だから』を中心に—」、『大阪大学言語文化学』3、79-93
- 安井永子・杉浦秀行. 2019. 「相互行為における指さし—ジェスチャー研究、会話分析研究による成果—」、安井永子・杉浦秀行・高梨克也（編）『指さしと相互行為』、3-34、東京：ひつじ書房.
- 横森大輔. 2018. 「会話分析から言語研究への広がり—相互行為言語学の展開」、平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実（編）『会話分析の広がり』、63-96、東京：ひつじ書房.